



TITLE:

スラヴ語の行為名詞 -nie, -tie について

AUTHOR(S):

山口, 巖

CITATION:

山口, 巖. スラヴ語の行為名詞 -nie, -tie について. ことばの構造とことばの論理 : 山口巖教授停年記念論文集 1998: 347-356

ISSUE DATE:

1998-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65815>

RIGHT:

スラヴ語の行為名詞 -nie, -tie について¹

序 言

§1 第2回印欧語研究者専門会議での発表に際して、筆者はスラヴ語の -ние, -тие に終る「行為名詞」に言及し、通説に従ってこの種の名詞は「意義的に動詞的色彩が極めて強く、自動詞からも他動詞からも自由に派生する事を得たところから、古代スラヴ語において格変化を行わない不定法にかわって広汎な使用をみた」と述べた²。

しかしこの種の名詞が接尾辞 *-no-, *-to- を有し、かつ行為を状態として観ずる被动形動詞過去から派生するものであるとするならば、これが「行為性」をもつということ自体、一つの矛盾であるとせねばならないであろう。

これと関連して、動詞と名詞の意義の相違を、認識における範疇的な相違に帰すべきであるとする著者の仮説から、動詞的意義の名詞的意義への転化をどのように説明するかという問題も、生じて来る。

これらの諸問題の解決のためには、この種の名詞の初原的な意義を明らかにしなくてはならない。その手はじめとして、この種の名詞とギリシア語原典の不定法との関係を考察しようというのが、この小論の趣旨である。

資料はグラゴール文字文献の古層にあると信じられている、ゾグラフ四福音書である。これは少くとも11世紀中葉以前に成立したと考えられている。後代の挿入とされる第41葉から第57葉までは、資料としては用いていない。

本 論

I. -nie, -tie に終る名詞と不定法

1. ギリシア語不定法との対応

§2 ギリシア語の不定法に対応する例は従来しばしば引用され、この種の名詞の意義の持つ動詞的性格を読者に印象づけているが、実際には極めて少数であって、269例のうち僅々10例を数えるにすぎない。

自動詞から派生したものは、

1) по въскрѣсновенн же моему, варѣжъ вы въ галлилен (p. 40, 66r15)

μετὰ δὲ τὸ ἐγερθῆναι με προάξω ὑμᾶς εἰς τὴν Γαλιλαίαν, (Matth. 26:32)

¹ 『京都産業大学国際言語科学研究所所報』第3巻第2号 昭和57(1982)年3月30日 50-59頁。

² 拙稿「スラヴ語における非人称受動表現」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』2(2), 1981, p. 108.

「しかしわたしは、よみがえってから、あなたがたより先にガリラヤへ行くであろう。」³

- 2) Ї ВНАДѢВЪ ꙗ СТРАЖДАЖШІА ВЪ ГРЕБЕННІИ БѢ БО ВѢТРЪ ПРОТНВЪНЪ
ІМЪ. (p. 57, 94r2)

καὶ ἰδὼν αὐτοὺς βασιανιζομένους ἐν τῷ ἐλαύνειν, ἦν γὰρ ὁ ἄνεμος ἐναντίος αὐτοῖς.
(Marc 6:48)

「ところが逆風が吹いていたために、弟子たちがこぎ悩んでいるのをごらんになって」

- 3) І МНОГОМЪ СЛѢПОМЪ ДАРОВА ПРОЗРѢНІЕ. (p. 94 155r15)

καὶ τυφλοῖς πολλοῖς ἐχαρίσατο βλέπειν. (Luc. 7:21)

「(イエスは) また多くの盲人を見えるようにしておられたが、」

§3 他動詞から派生したものとしては、

- 4) НЕПОДОБНТЕ СЯ ОУБО ІМЪ ВѢСТЪ БО ОУЪ ВАШЪ ІХЪЖЕ ТРѢБОУЕТЕ
ПРѢЖДЕ ПРОШЕННІА ВАШЕГО. (p. 5, 9v3)

μὴ οὖν ὁμοιωθῆτε αὐτοῖς, οἶδεν γὰρ ὁ πατήρ ὑμῶν ὧν χρεῖαν ἔχετε πρὸ τοῦ ὑμᾶς
αἰτῆσαι αὐτόν. (Matth. 6:8)

「だから、彼らのまねをするな。あなたがたの父なる神は、求めない先から、あなたがたに必要なものはご存じなのである。」

- 5) ВЪЗЛНѢВЪШНѢ БО СЯ МНРО НА ТѢЛО МОЕ НА ПОГРЕБЕНІЕ МА СЪТВОРН.
(p. 39, 64v15)

βαλοῦσα γὰρ αὕτη τὸ μύρον τοῦτο ἐπὶ τοῦ σώματός μου πρὸς τὸ ἐνταφιάσαι με
ἐποίησεν. (Matth. 26:12)

「この女がわたしのからだにこの香油を注いだのは、わたしの葬りの用意をするためである。」

- 6) ОУБОИТЕ СЯ ІМЖШТАДГО ВЛАСТЪ ПО ОУБЪЕНІИ ВЪВРѢШТИ ВЪ КЕОНЖ.
(p. 108, 178v7)

φοβήθητε τὸν μετὰ τὸ ἀποχεῖναι ἔχοντα ἐξουσίαν ἐμβαλεῖν εἰς τὴν γέενναν. (Luc.

³元の論文は、古教会スラヴ語の部分はラテン文字で翻字してあり、また邦訳もつけていないが、ここではスラヴ語はキリル文字で、表記し、邦訳をつけた。ソグラフ四福音書の底本は、*Editiones monumentorum slavlicorum veteris dialecti, Quattuor evangeliorum Codex glagoliticus olim Zographensis nunc Petropolitanus, characteribus cyrillicis transcriptum notis criticis prolegomenis appendicibus auctum adiuvante summi Ministerii Borussici liberalitate edidit V. Jagić, Graz, 1954.* である。なお使用したキリル文字は神戸市外国語大学助教授岡本崇男氏の作成にかかるものである。記して謝意を表したい。

12:4)

「殺したあとで、更に地獄に投げ込む権威のあるかたを恐れなさい。」

§4 この種の名詞が、能動・被動両様の相の意義をもって現われる例として、よく引用されるのは、次のものである。

7) ВѢСТЕ ЪКО ПО ДѢВОЮ ДѢНОУ ПАСΧА БЫВАЕТЬ· ꙗко ꙗзыци прѣдають сѧ на распатнѣ· (p. 38, 64r10)

Οἴδατε ὅτι μετὰ δύο ἡμέρας τὸ πάσχα γίνεται, καὶ ὁ υἱὸς τοῦ ἀνθρώπου παραδίδεται εἰς τὸ σταυρωθῆναι. (Matth. 26:2)

「あなたがたが知っているとおり、ふつかの後には過越の祭りになるが、人の子は十字架につけられるために引き渡される。」

8) ꙗко вѣдоша ѡ немъ на распатнѣ· (p. 43, 72r23)

καὶ ἀπήγαγον αὐτὸν εἰς τὸ σταυρῶσαι. (Matth. 27:31)

「(総督の兵士たちは)それから十字架につけるために引き出した。」

スラヴ語の相の区別は、この場合明らかに文脈に依存している。

§5 被動相不定法に対応するものには、この外次のような例がある。

9) по прѣданнѣ же іоанноу прѣде ѡс въ галилеѣ проповѣдава еваѣлнѣ ꙗкоже бжѣ; (p. 48, 78r9)

Μετὰ τὸ παραδοθῆναι τὸν Ἰωάννην ἦλθεν ὁ Ἰησοῦς εἰς τὴν Γαλιλαίαν κηρύσσειν τὸ εὐαγγέλιον τοῦ θεοῦ. (Marc. 1:14)

「ヨハネが捕えられた後、イエスはガリラヤに行き、神の福音を宣べ伝えた。」

10) оны же прѣлежаѣхъ гласы велнѣ· просаште его на пропатнѣ· (p. 132, 218v22)

οἱ δὲ ἐπέκειντο φωναῖς μεγάλαις αἰτούμενοι αὐτὸν σταυρωθῆναι. (Luc. 23:23)

「彼らは大声をあげて詰め寄り、イエスを十字架につけるように要求した。」

もし筆者の見落しがないとすれば、資料中に存在するこの種の例は、以上で尽されている。

ここから生じるのは、それではギリシア語の不定法は、スラヴ語の何によって訳出されていたか、という問題である。

II. ギリシア語不定法の対応

1. 目的をあらわすもの

§6 スラヴ語の不定法に対応するものは、皆無とはいわないまでも、全体からすれば意外に少数である。これらのスラヴ語の不定法は、目的をあらわす $\text{to}\ddot{\text{u}}$ + inf. にしばしば対応しているから、スピヌムの代用であるとみて、差支えないであろう。たとえば、

- 11) $\text{прѣдѣдешн во прѣдѣ лицѣмъ гнѣмъ} \cdot \overline{\text{о}\ddot{\text{y}}\text{готова ти пѣтъ егѡ} \cdot \text{дѣти}} \cdot \text{разоумъ спѣньѣ людемъ егѡ въ ѡста влѣньѣ въ отъпоуштенѣ грѣхъ на шнхъ} \cdot$ (p. 83, 136r14)

προπορεύση γὰρ ἐνώπιον κυρίου ἐτοιμάσαι ὁδοὺς αὐτοῦ, τοῦ δοῦναι γινώσιν σωτηρίας τῷ λαῷ αὐτοῦ ἐν ἀφέσει ἁμαρτιῶν αὐτῶν, (Luc. 1:76-77)

「主のみまえに先立って行き、その道を備え、罪のゆるしによる救をその民に知らせるのであるから」

- 12) $\text{клатвѣ ежже клатъ сѧ къ ѡбразу оцю на шемоу} \cdot \overline{\text{дѣти}} \cdot \text{намъ бѣ-}$
 $\text{страха} \cdot \text{ѡдрѣкы врагъ на шнхъ ѡбавльшемъ сѧ} \cdot$ (p. 83, 136r4)

ὄρχον ὃν ὤμοσεν πρὸς Ἀβραὰμ τὸν πατέρα ἡμῶν, τοῦ δοῦναι ἡμῖν ἀφόβως ἐκ χειρὸς ἐχθρῶν ῥυσθέντας. (Luc. 1:73-74)

「父祖アブラハムにお立てになった誓いをおぼえて、わたしたちを敵の手から救い出し…」

このように目的をあらわし、スピヌムと異なる不定法の使用は、スラヴ語のもつ統辞論的制約に起因すると考えられる。すなわち、スラヴ語においてスピヌムの使用されるのは、verba movendi に伴われる場合に限られているのである。この為爾余の動詞と共に用いられるのは、専ら不定法になる。

§7 しかし否定の μή を伴うものは、 $\Delta\alpha$ 等に導かれる副文章によって訳出される傾向がある。たとえば、

- 13) $\text{невѣзможно естъ да не прнѣжтъ съблѣзньн} \cdot$ (p. 118, 194v22)

Ἀνένδεχτόν ἐστιν τοῦ τὰ σκάνδαλα $\mu\eta$ ἐλθεῖν. (Luc. 17:1)

「罪の誘惑が来ることは避けられない。」

- 14) $\text{оу н же ею дрѣжадъ шете сѧ} \cdot \text{да егѡ не познѣдъ шете} \cdot$ (p. 134, 222v15)

οἱ δὲ ὀφθαλμοὶ αὐτῶν ἐκρατοῦντο $\text{τοῦ} \mu\eta$ ἐπιγῶναι αὐτόν. (Luc. 24:16)

「しかし(二人の弟子は)彼らの目がさえぎられて、イエスを認めることができなかった。」

§8 同じく目的をあらわすものに、 $\pi\rho\acute{o}s$ + inf. の構文がある。これは例 5) のように -nie, -tie に終る名詞によっても訳出されるが、その他にも **ѢКО** + inf. あるいは **КАКО** **ДА** に導かれる回説的表現が、みとめられる。

- 15) **Ї ВЪ ВРѢМА ЖАТВѢ РЕКЖ ДѢЛАТЕЛѢМЪ СЪВЕРѢТЕ ПРѢВѢ ПЛѢВЕЛЪ**
Ї СЪВАЖАТЕ ИА ВЪ СНОПЫ ЪКО ЖЕШТИ ИА (p. 19, 31v19)

Καὶ ἐν καιρῷ τοῦ θερισμοῦ ἐρῶ τοῖς θερισταῖς, Συλλέξατε πρῶτον τὰ ζιζάνια καὶ δῆσατε αὐτὰ εἰς δέσμας πρὸς τὸ κατακαύσαι αὐτά... (Matth. 13:30)

「収穫の時になったら、刈る者に、まず毒麦を集めて束にして焼き、麦の方は集めて倉に入れてくれ、と言いつけよう。」

- 16) **ВЪНЕМАЉТЕ МНЛОСТЫЊА ВАША НЕ ТВОРНТН ПРѢДЪ ЪК(Ы) ДА ВНДНМН**
БЖДЕТЕ ІМН (p. 5, 8v11)

Προσέχετε (δέ) τὴν δικαιοσύνην ὑμῶν μὴ ποιεῖν ἔμπροσθεν τῶν ἀνθρώπων πρὸς τὸ θεαθῆναι αὐτοῖς. (Matth. 6:1)

「自分の義を、見られるために人の前で行わないように、注意しなさい。」

§9 目的をあらわすギリシア語の不定法が、スピヌムによって訳出されることもある。すでに述べたように、この場合スピヌムと共に用いられるのは、原則として *verba movendi* である。

- 17) **І БЫСТЪ ЕГДА СЪКОНЫА НСЪ ЗАПОВѢДАМ ОВѢМА НА ДЕСАТЕ ОУГЕ-**
ННКОМА СВОІМА ПРѢИДѢТЕ ОТЬ ТЖДѢ ОУУНТЬ І ПРОПОВѢДАТЬ ВЪ
ГРДѢХЪ ІХЪ (p. 13, 22v21-22)

καὶ ἐγένετο ὅτε ἐτέλεσεν ὁ Ἰησοῦς διατάσσων τοῖς δώδεκα μαθηταῖς αὐτοῦ, μετέβη ἐκεῖθεν τοῦ διδάσκειν καὶ κηρύσσειν ἐν ταῖς πόλεσιν αὐτῶν. (Matth. 11:1)

「イエスは十二弟子にこのように命じ終えてから、町々で教えまた宣べ伝えるために、そこを立ち去られた。」

- 18) **ЇДЖШТАМЪ ЖЕ ІМЪ КОУПНТЬ ПРНДЕ ЖЕННХЪ** (p. 37, 60v23)

ἀπερχομένων δὲ αὐτῶν ἀγοράσαι ἦλθεν ὁ νυμφίος. (Matth. 25:10)

「彼らが買いに出ているうちに、花婿が着いた。」

§10 この外 $\tau\omicron\upsilon$ + inf. がスラヴ語の回説的表現に対応する場合がある。

- 19) **КЪТО ОУБО ЕСТЬ ВѢРНЫ РАБЪ І МЖДРЫ, ЕГОЖЕ ПОСТАВНТЬ ГЪ НАДЪ**
ДОМОМЪ СВОІМЪ ДА ДАСТЪ ІМЪ ВЪ ВРѢМА ПНШТЖ ІХЪ (p. 36, 59v22-23)

Τίς ἄρα ἐστὶν ὁ πιστὸς δοῦλος καὶ φρόνιμος ὃν κατέστησεν ὁ κύριος ἐπὶ τῆς οἰκετείας αὐτοῦ τοῦ δοῦναι αὐτοῖς τὴν τροφὴν ἐν καιρῷ; (Matth. 24:45)

「主人がその家の僕たちの上に立てて、時に応じて食物をそなえさせる忠実な思慮深い僕は、いったい、だれであろう。」

- 20) Ї ПОМАНѢША ПРНУАСТѢННКОМЪ· ЇЖЕ ВЪАХѢ ВЪ ДРОУЗѢМЪ КОРАБѢН·
ДА ПРНШѢДЪШЕ ПОМОГѢТЬ ЇМЪ· (p. 89, 145v21)

Καὶ κατένευσαν τοῖς μετόχοις ἐν τῷ ἑτέρῳ πλοίῳ τοῦ ἐλθόντας συλλαβέσται
αὐτοῖς. (Luc. 5:7)

「そこで、もう一そうの舟にいた仲間に、加勢に来るよう合図をした。」

Δ4に導かれる副文章は、形式的にはギリシア語の *ἵνα + conj.* と同等である。このような回説的表現は、原文の不定法が種々の修飾語を伴う場合に多くみとめられるが、一方不定法あるいはスピヌムによって訳出されている場合にも、種々の修飾語を伴うものが少くない。従って修飾語の存在は、訳出に際して行為名詞を用いるか否かを決定する規準となったとしても、回説的表現を選ぶか不定法あるいはスピヌムを選ぶかという規準には、ならなかったと考えられる。

2. 時間的先後関係をあらわすもの

§11 これに属するものには、*πρό, μετά, πρίν + inf.* の構文がある。

μετά + inf. は例 1)、6)、9) にみられるように、すべてスラヴ語の行為名詞によって訳出されている。

πρό + inf. も例 4) のように行為名詞によって訳出される場合がある。

この外ギリシア語の不定法には対応しないが、時間的先後関係をあらわす文脈において、行為名詞がしばしば用いられていることから、この種の文脈においては、ギリシア語の不定法の意義が、相対的に行為名詞に近づいていた(逆は真ではない)と推定される。これはこれらの不定法が何れもアオリスト形であることによっても裏づけられる。

この例外をなすのは *πρίν + inf.* である。これは常に прѣжде даже に導かれる副文章によって訳出されているが、その理由は明らかではない。ただスラヴ語でこれが常に虚辞的な не を伴っていることから、訳者が *πρίν + inf.* の不定法によって示される行為を、話者にとってその実現が好ましくないものと理解していたのかもしれない。

- 21) ρεγε εμοῦ ἡς· ἄμην ἡ γλῶττεβ· ἔκο βὲ σνῆλ νοшт̃ прѣжде· даже
коур̃ не вѣзгласнт̃· трн краты отъврѣжешн сѧ мене· (p. 40, 66r23)

ἔφη αὐτῷ ὁ Ἰησοῦς, Ὁ ἀμὴν λέγω σοι ὅτι ἐν ταύτῃ τῇ νυκτὶ πρίν ἀλέχτορα φωνῆσαι
τρίς ἀπαρνήσῃ με. (Matth. 26:34)

「イエスは言われた、「よくあなたに言うておく。今夜、鶏が鳴く前に、あなたは三度私を知らないというだろう。」

3. 同時的行為をあらわすもの

§12 ギリシア語原典には *ἐν + inf.* によって同時的行為をあらわす構文が、比較的多数みとめられる。これは例 2) を除き、すべて回説的に訳されている。

この構文の圧倒的多数は、*εΓΔΔ* に導かれる副文章に対応している。

- 22) *εΓΔΔ* *ΝΑ Νῆ ΓΛΔΧ* *ΔΡ'ΧΗΕΡΕΙ Ι' ΣΤΑΡΨΗ· ΝΗΥΣΟЖЕ ОΤΒῆШТАΒΔΔШЕ·*
(p. 42, 70v17)

καὶ ἐν τῷ κατηγορεῖσθαι αὐτὸν ὑπὸ τῶν ἀρχιερέων καὶ πρεσβυτέρων οὐδὲν ἀπεκρίνατο. (Matth. 27:12)

「しかし、祭司長、長老たちが訴えている間、イエスはひと言もお答えにならなかった。」

- 23) *БЫСТЬ ЖЕ εΓΔΔ БЫСТЕ* *ΤΟΥ· ΙΣΠΛῆΝΗШΑ СΛ ДῆНЬЕ РОДНТН ΕΙ·* (p. 83, 136v22)

Ἐγένετο δὲ ἐν τῷ εἶναι αὐτοὺς ἐκεῖ, ἐπλήσθησαν αἱ ἡμέραι τοῦ τεκνεῖν αὐτήν... (Luc. 2:6)

「ところが、彼らがあそこ(ベツレヘム)に滞在している間に、彼女(マリア)は月が満ちて...」

§13 この構文に現在不定法の使用されるのが多いことは、同時的行為という意義からして当然であるが、アオリスト不定法の使用も排除されている訳ではない。

- 24) *εΓΔΔ ЖЕ ΓΛΔΔШЕ· ΜΟῤῥῆΔШЕ Ι' ΦΑΡΗΣΕΙ ἝΤΕΡῆ·* (p. 107, 176r17)

Ἐν δὲ τῷ λαλῆσαι ἐρωτᾷ αὐτὸν Φαρισαῖος... (Luc. 11:37)

「イエスが語っておられた時、あるパリサイ人が...申し出たので...」

- 25) *Ι' БЫСТЬ ΕΓΔΔ СΛ ВῆЗВРАТН ПРНІМῆ ἸРСῆЕ...* (p. 122, 202r13-14)

Καὶ ἐγένετο ἐν τῷ ἐπανελθεῖν αὐτὸν λαβόντα τὴν βασιλείαν... (Luc. 19:15)

「さて、彼が王位を受けて帰ってきたとき...」

§14 *ἐν + inf.* はまたしばしば *dativus absolutus* によって訳出されることもあった。これもこの構文の有する同時性の意義からよく説明できる。

- 26) ВЪВРАШТАЖШТЕМЪ СѦ ІМЪ· ѿСТА ѦТРОКЪ НС· ВЪ ІАМЪ... (p. 85, 139v17)

ἐν τῷ ὑποστρέφειν αὐτοὺς ὑπέμεινεν Ἰησοῦς ὁ παῖς ἐν Ἱεροσολήμ... (Luc. 2:43)
「(さて祭りが終って) 彼が帰るとき、少年イエスはエルサレムに居残っておられたが...」

- 27) ОУБОѢША ЖЕ СѦ· ВЪШЪДЪШЕМЪ ЖЕ ІМЪ ВЪ ОВЛАКЪ... (p. 101, 166v6)

ἐφοβήθησαν δὲ ἐν τῷ εἰσελθεῖν αὐτοὺς εἰς τὴν νεφέλην... (Luc. 9:34)
「(彼らが) その雲に囲まれたとき、彼らは恐れた...」

4. 原因をあらわすもの

§15 不定法と結ぶ前置詞には、この外原因をあらわす διὰ がある。この構文はすべて回説的に訳出されているが、用いられているのは大部分が接続詞 ЗАНЕ、一部が小詞 БО である。

- 28) ἃ ΔΡΟΥΓΟΕ ΠΑΔΕ ΝΑ ΚΑΜΕΜΕ· ἰ ΠΡΟΖΑΒЪ ОУСЪШЕ· ЗА НЕ НЕ ІМѢАШЕ
ВЛАГЫ· (p. 96, 158v5)

καὶ ἕτερον κατέπεσεν ἐπὶ τὴν πέτραν, καὶ φυὲν ἐξηράνθη διὰ τὸ μὴ ἔχειν ἰχμάδα.
(Luc. 8:6)

「ほかの種は岩の上に落ち、はえはしたが水気がないので枯れてしまった。」

- 29) БѢ БО ЖЕЛѢА ѦТЪ ΜΝΟΓΑ ΒΡѢΜΕΝΕ ΒΗΔѢΤΙ Η· ЗА НЕ СЛЫШАΔΑШЕ ΜΝΟΓΑ
Ѧ ΝΕΜЪ· (p. 131, 217v14-15)

τὴν γάρ ἐξ ἰκανῶν χρόνων θέλων ἰδεῖν αὐτὸν διὰ τὸ ἀχοῦειν περὶ αὐτοῦ ... (Luc. 23:8)

「(ヘロデはイエスのことを) 聞いていたので、会ってみたいと長いあいだ思っていた。」

- 30) НАВОДЬЮ ЖЕ БЫВЪШЮ· ΠΡΗΠΑΔΕ ΡѢКА ΧΡΑΜΗΝѢ ΤΟΙ· ἰ ΝΕ ΜΟЖЕ ПОД-
ΒΗΓΝѢΤΗ ΕΛΛ· ѦСНОВАНА БО БѢ НА ΚΑΜΕΝΕ· (p. 93, 153r21-22)

πλημμύρης δὲ γενομένης προσέρηξεν ὁ ποταμὸς τῇ οἰκίᾳ ἐκείνῃ, καὶ αὐκ ἴσχυσεν
σαλεῦσαι αὐτὴν διὰ τὸ καλῶς οἰκοδομηθῆναι αὐτὴν (τεθεμελίωτο γὰρ ἐπὶ τὴν
πέτραν.) (Luc. 6:48)

「洪水が出て激流がその家に押し寄せてきても、それを揺り動かすことはできない。
岩の上によく建ててあるからである。」

5. 結果をあらわすもの

§16 ギリシア語では結果の意義をあらわすのに、ὥστε + inf. の構文を用いることがあ

るが、これも -nie, -tie に終る名詞によって訳出される事はない。ѢКО + inf. の構文あるいは ѢКО によって導かれる副文章を用いるのが通例である。

- 31) ꙗꙋѣѣраша сѧ къ ѡемоу нароудѧ мнозѧ ꙗꙋ ѢКО вѣлѣзѣ въ корабѣ сѣде... (p. 17, 29v2-3)

καὶ συνήχθησαν πρὸς αὐτὸν ὄχλοι πολλοί, ὥστε αὐτόν εἰς πλοῖον ἐμβάντα καθῆσθαι... (Matth. 13:2)

「ところが、大ぜいの群衆がみもとに集まったので、イエスは舟に乗ってすわられ...」

- 32) ТОГДА ПРИВѢСА ЕМОУ ВѢСѢНОУЖШЕ Сѧ СЛѢПѢ ꙗꙋѣмѢ ꙗꙋѣлѧ ꙗꙋ ѢКО СЛѢПѢ ꙗꙋ ГЛОУХѢ ꙗꙋ ГЛАДШЕ ꙗꙋ ГЛАДАДАШЕ (p. 15, 26v16-18)

Τότε προσηγγέθη αὐτῷ δαιμονιζόμενος τυφλὸς καὶ χωρὸς καὶ ἐθεράπευσεν αὐτόν, ὥστε τὸν χωρὸν λαλεῖν καὶ βλέπειν. (Matth. 12:22)

「そのとき、人々が悪霊につかれた盲人のおしを連れてきたので、イエスは彼をいやして、物を言い、また目が見えるようにされた。」

- 33) ꙗꙋ ТВОРИТЕ ВѢТВѢ ВЕЛЫѧ ꙗꙋ МОШТИ ПОДЪ СѢНИѧ ЕГО ꙗꙋ ПТИЦѧМЪ НЕБЕСКЫМЪ ВѢТАТИ (p. 53, 86v2)

καὶ ποιεῖ κλάδους μεγάλους, ὥστε δύνασθαι ὑπὸ τὴν σκιὰν αὐτοῦ τὰ πετεινὰ τοῦ οὐρανοῦ κατασκηνοῦν. (Marc. 4:32)

「(一粒のからし種がまかれると)大きな枝を張り、その陰に空の鳥が宿るほどになる。」

結 論

§17 以上述べてきたところから、-nie, -tie に終る名詞が一般に不定法を代替しうるものではなかったこと、この種の名詞が不定法と競合する領域は極めて限られていること、が明らかになったと思われる。

このように 1) ギリシア語の不定法の意義の範囲が極めて広汎であるにもかかわらず、スラヴ語の -nie, -tie に終る行為名詞に対応するのが稀であるという事実、2) ギリシア語の不定法が、スラヴ語の不定法、スピヌムおよび回説的表現によって訳出されていること、などから、スラヴ語の不定法とこの種の行為名詞とは、截然と区別されており、しかも行為名詞の動詞的性格が、予想されたよりもはるかに低いと結論される。

しかし両者の意義を単なる思弁によって区別し、あるいは同定することは、危険であろう。必らずそこに研究者の母語の干渉があると、予測されるからである。従来この種の名詞を「変化する不定法」と考えて来たという、まさにそのことが、何よりも雄弁にこの間

の事情を物語っている⁴。両者の相違を明らかにするためには、何よりもまず、その使用の相における綿密な分析と方法的な取扱いを必要とするであろう。

両者の相違がどのようなものであるかについては、考えのない訳ではないが、与えられた紙幅はすでに尽きた。稿を改めるより外はない。

⁴A. Vaillant, *Grammaire comparée des langues slaves*, t. III, Le verbe, Paris 1966, p. 122;
F. Miklosich, *Vergleichende Grammatik der slavischen Sprachen*, Bd. IV, Syntax, Heidelberg, 1926,
p. 877 etc.